

可被申談候事。

(寶曆七年) 二月

口達之趣

御家中檢約之儀、荒増覺書相渡候。畢竟御上御難澁至極に付、願ヶ間敷趣先は難承届候間、其儀能々相心得、參會等を初、先年より檢約之儀申渡候紙面之上をも、尙更減可勤仕儀肝要に候。供之人數、旅行之面々從者等之儀、書立不相渡候得共、各方にて隨分省略可被申談事。

三四 勝手取續奉公可相勤儀觸

御家中之面々困窮に付、御救被成度思召に候得共、御勝手御難澁之上、近年打續御領國作毛不熟、別而去年は不作、莫大之御損毛有之段は、各に茂粗被存通に候。依之當年大阪爲御登米微少にて、御借銀手返も難成に付、御當用御かり銀も相調不申故、江戸御仕送は勿論、當秋御參勤御入用必至と差支候段、彼地より申來候に付、種々遂免議候得共、可被成手段も無之、致當惑候族故、何分及困窮候ても御救

可被成様も無之候。右之趣に付、諸事願之品等有之候ても、無是非難承届御時節に候。如斯之趣に候間、御家中之人々内外嚴重に遂檢約、人馬等も成限り致減少、音信贈答參會之儀も當分差止、尤着類等も塵品を用ひ、妻子・家來は猶以之儀、外出之節高知たりとも人少召連、子弟は右に准彌輕召連、所詮いか様ともいたし勝手取續、御奉公可相勤儀肝要に候。他國御使、江戸表等々詰人として罷越候節召連候從者減少、婚禮・家作等輕く相調候儀、時々頭々可有示談候。是等之趣は大綱にて、年若成人々は文武之稽古無怠慢、亂舞遊興之族は急度相愼候様可被申渡事。

(寶曆八年) 戊寅二月廿二日

御家中之人々内外嚴重遂檢約、勝手取續御奉公可相勤段、拙者共迄御内意之趣、今般一統申渡候通に候。就夫人馬減少之儀に付、各僉議之品も有之候は、同役中途熟談、其趣

可被申聞候。可及示談旨各迄申談置候。一季居奉公人男女、人數多致減少候人々も有之様致沙汰候。一度に人數多相減、致流浪候もの有之候ては、御爲不宜儀に候條、減じ候儀其心得も可有之事に候。且又奉公人男女給銀之儀、前々相觸候趣を以召置候様に相心得可然候。此段各爲心得申達候事。

(寶曆八年) 寅三月

三五 役銀・出銀上納延期之儀觸

御家中之人々勝手致難澁候處、去暮以來別而才覺銀等相調不申、甚指問候躰に付、當春上納之役・出銀、當七月迄御用捨被成候。尤上納仕度人々は勝手次第差上可申候。七月は十日切に取立上納可有之事。

右之趣被得其意、組・支配之人々に可被申渡候。且又組等之内裁許有之面々は、其支配にも相達候様被申聞、同役中可有傳達事。

右之趣可被得其意候。以上。

(寶曆九年) 二月廿日

横山山城守

御家中之人々勝手難澁に付、當春上納之役・出銀當月迄上納御用捨に付、當月十日切取立上納有之候様申渡置候處、當半納米直段下直、其上當四月火事に付類燒之人々は勿論、左も無之人々も一統難澁上納指支候躰に付、此度之儀は格別之趣を以、右上納當十月迄御用捨被成候。尤上納不差支人々は、差上候儀勝手次第に候。十月は急度取立上納可有之事。

(寶曆九年) 七月六日

前田駿河守

御家中之人々勝手難澁に付、當春上納之役・出銀兩度御用捨有之、當十月兩様共上納有之候。且又當暮當役・出銀之儀、上納可仕儀に候得共、當時才覺銀等相調不申、其上當四月火事に付類燒之人々は勿論、左茂無之面々も一統難澁上納差支候躰に付、此度之之は格別之趣を以、當暮役・出銀之儀は上納御用捨被成候。右役銀上納之譯は、來年に至可申渡候。尤上納不差支人々は、差上候儀勝手次第に候。將又役・出銀之儀重き品に付、是以後御用捨之御沙汰は無之候條、來年